

## レクリエーションの意味の標準化について

吉 田 圭 一

(武庫川女子大学文学部教育学科人間関係コース)

## A definition for the meaning of Recreation

Keiichi Yoshida

*Department of Human Relations, Faculty of Letters,  
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan*

The purpose of this study is to propose standardizing a meaning of recreation. The meaning is in the chaotic situation in Japan. Accordingly, recreation movement has not been well developed. The study consists of four points of view: (1) the derivation of a term "recreation"; (2) the usage of the term "recreation" in daily life; (3) the relations between recreation and leisure life and/or working life; and (4) the research activities in "recreation".

The study suggests a definition of "recreation" as recovery of humanity in terms of the derivation of a word. The study also proposes the use of another word other than "recreation" for expressing recreational activities and behavior. Finally, the study indicates that the importance of the use of a standardized term in research.

### 緒 言

近年、「レクリエーション」という言葉が日常的に使われることが多くなり、この言葉が使われる場面も多岐にわたるようになった。余暇時間の増加や「人間らしい生き方」を模索しなければならない世相のなかでは当然の現象であろう。

しかし、レクリエーションという言葉が用いられる機会や場面が多くなればなるほど、この言葉に、より明確な意味が求められることになるのであるが、現実には「レクリエーションという言葉の意味」は明確ではなく、いまだ混沌とした状態にあるといっても過言ではない。

レクリエーションという言葉、その場かぎりの都合で安易に用いることは、結局「レクリエーションとは何ぞや」、という最も重要な問題を置きざりにした、軽い(あまり重要なものではない)意味の言葉としての位置づけしか持たず、将来的にも曖昧で、さほど重要でない言葉としての域を出ないものとなる危険性がある。

レクリエーション研究の分野においてさえ、レクリエーションの本質的な意味を追求することがさほど重視されず<sup>1)2)</sup>、現象的な部分での研究が先行する傾向がある。現象的・具体的部分の研究も貴重であることには違いないが、基本的な部分(特に言葉の意味)での合意や統一がないかぎり、それはそれぞれの領域における狭い範囲だけの価値しか持たないものとなり、レクリエーションという言葉を用いるすべての領域に影響を与え、その発展に寄与する研究とはなり得ないのである<sup>3)</sup>。このことは、苦勞の末に生まれた貴重な研究の社会的な認知を疎外することにもなり、また、わが国におけるレクリエーションの発展にとって大きなマイナスとなることでもある。

レクリエーションの意味として、いくつかの概念が存在することは既に多くの研究によって明らかであり、それぞれの概念の存在理由も、時代的背景や価値観の変遷などの理由から当然のものとして理解できるのであるが、「レクリエーションという言葉の意味」が、いくつも存在すること自体が問題なのである。ある言葉を表す意味

は基本的に一つであるべきであり、その基本的な一つの意味が時代的背景や価値観の変遷にかかわらず、いつの時代においても大切にされてこそ、その言葉が表そうとしている理念や哲学が発展していくのである。

すべての人々が同一の意味でレクリエーションという言葉を確認し、またレクリエーションに関する研究においても、その底辺としての「レクリエーションの意味」が共通に理解されなければ、レクリエーションという言葉をいかに大きく叫び、また貴重な研究がどれほど多く試みられようとも、それは砂上の楼閣でしかないのである。

人間の生き方とのかかわりのなかで、レクリエーションの使命が大きく求められ、その発展が期待されている現在、レクリエーションの研究と実践に携わる者が、率先してその意味を確立し、啓蒙に力を尽くすことが急務である。またそのことは、わが国の社会において、レクリエーションが正当で高い評価を得ることにもなり、その研究や実践に対して今以上の大きな期待を寄せられることにつながるのである。さらにこのことは、レクリエーションに関する研究活動や実践が、人々の豊かで幸せな生活にとって、いかに重要なものであるかを認識させることにもなるのである。

## 研究の方法

レクリエーションの意味を確立するために、レクリエーションという言葉が本来何を意味すべきものなのかについて、「語源」「言語の使用」「関連する社会事象」「研究上の必要性」等、四つの観点から考察する。

「語源的側面」については、客観性と深まりのある先行研究を参考に、レクリエーションという言葉の本質的な意味を探り、「言語使用の側面」からは、レクリエーションという言葉がどのように使われるべきなのか、またレクリエーションに関連する具体的事象に対してどのような言葉を用いるべきなのかについて、哲学的課題の一つである〈内包〉と〈外延〉の関係を当てはめながら探ってみよう。

さらにレクリエーションに関連する「社会的事象の側面」からは、労働や余暇という人間の社会的生活の場面とレクリエーションという言葉との関係について、人間の本質における労働や余暇の価値とからめながら、レクリエーションが本来的に目指すべき目的は何なのかを語源の意味との関係から考察し、「レクリエーション研究領域の側面」からは、レクリエーションに関する研究活動の充実やレクリエーション学そのものの発展のために、レクリエーションの意味が確立されるべき必要性やレクリエーションという言葉が持つべき意味について考察する。

## 考 察

### 1. 語源的側面

言葉の意味を探り、それぞれの言葉がどのような意味をもって使われるべきなのかを知ろうとするとき、それぞれの言葉の語源の意味へのアプローチを抜きにしてそのことは不可能である。

レクリエーションに関する語源的側面からの先行研究も多くあるが、そのほとんどは十分な考察がなされているとはいえない。そのような先行研究のなかでは『筑波大学体育科学系紀要(1978)』において、片岡らが考察している Oxford 英語辞典等による歴史的概念の展開に関する語源の解釈<sup>4)</sup>が最も適切であると思われる。

それによると、英語圏において recreation は、re-creation よりも早くから使用されていたとされ、recreation の最も早い用例は「食事を共にすることによってリフレッシュすること、軽い飲食、(精神的影響および飲食による)元気回復、滋養」として 1390 年から現われていると述べ、その後のいくつかの用例から recreation は「生活空間のあらゆる側面に適用されて来た概念であることがわかる」とし、「レクリエーションの概念として明確化されるべきものは、あらゆる物を照らす太陽光線に相当するものを求めるということになる」<sup>5)</sup>と考察している。またドイツ語では、レクリエーションと同語源・同義語の rekreation に注目し、rekreation の意味の一部を erholung(気晴らし、休養)が構成し、また他の一部を belustigung(娯楽、楽しませる、喜ばせる)が構成しているとし、「rekreation は lust(愉悅、快樂)の意味を含んでくる」<sup>6)</sup>としている。

このような考察から、片岡らは「レクリエーション」を、英語の語源においては「飲食物の摂取によって生じてくるようなある種の人間内部における変化」、またドイツ語においては「失われたものを取り戻し、及び愉悅」であるとし、レクリエーションの目指すものを「人が生き続けていくためのエネルギー」であるとしている<sup>7)</sup>。

また、片岡は『レクリエーション学の方法』のなかで、英語圏において recreation という名前が与えられている“ある一群の事実”が『失われた「何か」（力とかエネルギー）を再び創り出す、取り戻すという基本的な構造を持っていることが伺われる』<sup>8)</sup>と述べている。

このように見てくると、レクリエーションという言葉は「人間にかかわるある状態」を表す言葉として出発したことが分かり、ある状態とは「人が生き続けていくためのエネルギーの回復」、つまり「人間性の回復」なのではないだろうか、というところにたどりつくことになる。また、recreation は語源的に愉悦や快樂等、人間にとっての心地よさの意味も含まれているため、ここで言う「人間性の回復」は、その過程において「楽しさや喜び」の要素を含むものであると考えられる。

さらに、このような事実と考察から、レクリエーションという言葉がもともと具体的な行動や活動そのものを示していた言葉ではなかったことも分かるのである。

## 2. 言語使用の側面

ある言葉を使用するとき、その言葉の持つ意味が投げ手と受け手の間で共通に理解されて初めて言語としての意味を成すものであるが、「レクリエーション」という言葉は、現時点においてそのような共通理解の上に立って使用されている言葉とはいえない。

篠田は『レクリエーション哲学』のなかで『“レクリエーション”という言葉を知ったとき、多くの人びとは何を思い浮かべるであろうか。恐らく極めて多くの観念が混乱したかたちで存在することであろう。確かにレクリエーションという言葉は日常化し、一般化してきており、使用頻度も多いがそれが何を意味しているかということになるとかなりあいまいで、・・・』<sup>9)</sup>と述べている。

既に、いろいろな立場や考え方でレクリエーションという言葉が用いられているわけであるが、その用い方において、あまりにも大きな差を感じる場面は、この言葉が根本的な意味を表して用いられる場合と、同時に具体的な活動を指す意味で用いられる場合である。ある者は、語源的な意味を生かした「人間性の回復」という人間の生き方の一つとしての姿を意味する根本的な観念として用い、またある者は、いろいろな遊びや旅行・スポーツ・芸術など具体的な活動を意味して用いるような場合である。このことは、言葉の概念を探る場合の哲学的課題の一つである〈内包(intension)〉と〈外延(extension)〉の関係にある事柄に対して、同一の言葉を用いてしまうことになるのである。

〈内包〉と〈外延〉の関係について篠田は『レクリエーションの実態概念は、レクリエーションの実際行われている実態をみつめつつ、この語を逐語していく過程において明らかになっていくだろう。語の意味を確定するには、論理的な規約に従うのがよいであろう。普通レクリエーションという語の意味には、2つの側面がある。たとえば、いろいろな遊び・ゲーム・スポーツ・登山などの活動は、すべてレクリエーションと呼ばれ、レクリエーションという語の〈外延(extension)〉を構成している。すなわち、レクリエーションという語の外延は、この言葉にあてはまるような、いろいろな事物の集合から成り立っている。』<sup>10)</sup>と論じ、また芳賀はその関係を『レクリエーション概念の内包とは「生きる活力を再び作り出すこと」、「人間特有の行為」、「楽しい活動」——といった共通の本質的特性（概念の性質）である。概念の内包を確定することを「定義」と呼んでいる。外延からアプローチするとは、どこまでがレクリエーションという言葉を使って誤りではないかを検証することである。我々がレクリエーションの意味を知っているということは、個々の現象に対してこれはレクリエーションである、あれはレクリエーションではないと判断できるということである。すなわちレクリエーション概念の外延を知っているということなのである。』<sup>11)</sup>としている。

ある言葉が根本概念を指す言葉として使われるとき、その同じ言葉が〈外延〉としての具体的な事柄を指す意味で使われることがあってはならないのである。そのような使い方をすれば、その言葉に対する議論も空転を続けることになり、一番肝心の基幹となるべき「定義」は生まれてこない。

何事においても、まず根本概念を指す「定義」としての言葉が確立され、次にその根本概念を具現化する具体的な事項を意味する別の言葉がそれぞれの立場で用いられるべきなのである。それは「目的」を表す言葉と、「方法・手段」を表す言葉との関係に似ている。これをレクリエーションという言葉の場合に当てはめてみると次のようなことがいえる。

ある目的を表す「レクリエーション」という言葉があり、その目的を達成するための方法や手段として「レク

リエーション活動」「レクリエーション行動」などの言葉が使われるべきなのである。「レクリエーション」という言葉を使って表すべきものは、あくまでもその理念や目的とするものでなくてはならない。具体的な活動や場面を表す場合には「レクリエーション活動としてのゲーム」「レクリエーション行動としての旅行」というように使うべきであり、「今日のレクリエーションはゲームを行いません」や「今年のレクリエーションは旅行に決まりました」などのような使い方をすべきではないのである。

このように、「レクリエーション」という言葉と「レクリエーション活動」や「レクリエーション行動」という言葉を使い分けることで、レクリエーションの根本概念の部分に対する視点がより明確になり、定義づけに関する議論も実りあるものになる。また「レクリエーション活動」や「レクリエーション行動」としての具体的な種目やその在り方についての議論も、より明確な土俵の上で行えるのである。たとえ面倒であっても、「レクリエーション」という言葉と「レクリエーション活動」「レクリエーション行動」等の言葉を、レクリエーションにたずさわる研究者やレクリエーション活動を指導する指導者が、率先して使い分けるべきなのである。

### 3. 関連する社会的事象の側面

現在、レクリエーションという言葉が最も頻繁に用いられる場面は、労働や余暇という人間の社会的生活の部分である。

労働とレクリエーションの関係は、レクリエーションが「労働力の再生産」や「労働によって失ったものの回復」を意味する言葉として使われるようになったときに始まり、特に「労働によって失ったものの回復」という概念はレクリエーションの目的の一つとして現在も大きな意味を持っている。しかしある時期にレクリエーションという言葉がそのような意味を強く持って使われ、また現在もそうであるとしても、語源的にみてそれはレクリエーションの本質的な目的ではあり得ないことは明白である。

レクリエーションという言葉が、さまざまな時代的背景の都合で色々な意味を持たされてきたことは、吉田が『我が国におけるレクリエーション観の変遷』のなかで述べているが<sup>12)</sup>、それによるとレクリエーションの意味とされたもののほとんどが、レクリエーションの本質的な部分を置きざりにし、それぞれの時代の価値観や政策的な意図によって作り出されたものであることが分かる。

レクリエーションの語源的な意味における「人間性の回復」という本質的な部分から考えたとき、「労働によって失ったものの回復」という概念も、失ったものが「人間性」であり、回復すべきものもまた「人間性」であるという点では意味を持つことになるが、それはあくまでも「失ったものの回復」という部分でレクリエーションの本質と関連するのであり、決して「労働」そのものと関連するものではない。人間性を失わせる原因として存在するさまざまな要因の一つとして「労働」が考えられるのであり、その意味でレクリエーションという言葉が必要以上に労働と関連づける必然性はないのである。

たしかに現代社会においては、人間性を喪失させる原因として、労働という場面が大きな位置を占めていることは疑い余地はないが、たとえそれがいかに大きな部分であったとしてもすべてではなく、あくまでも一つの部分であることを忘れてはならない。人間性を喪失させるものは労働の場面以外にも、過密な都市や過疎の農村における人間関係など、さまざまな日常の地域社会における生活の場面にも存在するのである。

レクリエーションが本質的に意味するものは、原因が何であるかにかかわらず、「人間性の回復」という部分そのものであり、レクリエーションという言葉がかかわるのは、人間のすべての生活に対してなのである<sup>13)</sup>。このように考えてみると、レクリエーションという言葉は労働に対して存在するのではなく、まして労働に対する補償の意味を持つものではない。もっと幅の広い人間の生き方にかかわるものであることが分かるのである。

労働の場面が、人間性を喪失させる大きな部分であることは前に述べた。労働の場面で失った「人間らしさの発揮」や「人間としての喜び」などは、人間が人間らしく生きるために、どこかで取り戻さなければならない問題であり、「余暇の善用」という考え方の存在は<sup>14)</sup>、余暇という時間のなかでそのことを考えようとする発想の表れである。たしかに、余暇を有効に使うことによって、そのなかで人間らしく生きることができ、人間らしい喜びを得ることもできる。現在のような社会の組織や状況ではレクリエーションの大きな役割がここに存在することも事実である。

しかし、レクリエーションの本質を「人間性の回復」として考えるとき、「余暇における人間性の回復」や「余暇における楽しい活動」などは、レクリエーションという言葉が表す本質的な意味にはなり得ないのである。な

ぜなら、余暇が「レクリエーション」のためにいかに適した時間であっても、レクリエーションという言葉には、本質的に「余暇」という時間的な制限が含まれていないと考えるからである。

「人間性の喪失」がすべての時間で起こり得ることは疑う余地がなく、「人間性の回復」もまたすべての時間で考えなければならないのである。余暇という時間が「人間性の回復」にとって都合の良い有効な時間であり、「人間性の回復」を目的とする活動のほとんどがこの時間に集中していることも事実であるが、そのことで大切な部分に対して錯覚を持ってはならない。「人間性の回復」が可能である時間は、余暇という場面以外にも存在することを忘れてはならないのである<sup>15)16)</sup>。

「余暇における人間性の回復」をレクリエーションの意味として使うとき、それはレクリエーションの本質的な「人間性の回復」を余暇という場面でのみ可能とする誤解を生じることになり、他の時間における「人間性の回復」への可能性や努力を封じることにもなる。また、ある時間のみで「人間性の回復」を可能として考えることは、その時間以外での「人間性の喪失」を肯定することにもなり、労働やさまざまな社会生活を「より人間らしく生きる」場面としてとらえようとする意識を奪うことにもなる。人間の生きる時間をトータルとして考えるとき、すべての時間で人間らしく生きることが追求されるべきであり、いかなる時間においても人間性の喪失が肯定されるべきではないのである。

このように、労働や余暇という人間の社会的生活の側面をレクリエーションと関連づけて考えてくると、労働はレクリエーションを必要とする原因の一つであり、余暇もレクリエーションを実現するための一つの時間でしかないことが分かる。レクリエーションという言葉の意味を明確にするためには、レクリエーションの本質的な部分における労働や余暇との関係を根本的に整理し、語源的にも合理性のある定義づけが必要とされるのである。また、レクリエーションという言葉が労働や余暇と関連づけて使用する場面においても、「労働の結果、レクリエーションを目指す活動が必要である」とか「余暇においてレクリエーションを考える」「日常生活におけるレクリエーションとしての行動」などのように、それぞれの本質的な意味が整理されて用いられるべきなのである。

#### 4. レクリエーション研究領域の側面

近年、レクリエーションに関する研究領域の拡がりには目を見張るものがある。レクリエーションが本質的に持っている意味の大きさと深さを見せつけられるような気がする。

レクリエーションに関する研究の手引書としては、現在のわが国における最もまとまったものとして『レクリエーション学の方法』があり、それによるとレクリエーションに関する研究領域は次のような分類になる。

大きくは、「歴史と原論」「意識と行動」「活動とプログラム」「サービスと運営管理」「資源と空間」「政策と運動」の6章に分類され、それぞれをさらに細かくみていくと、「レクリエーションの歴史的研究」「レクリエーションの哲学的研究」「レジャー・レクリエーション行動に関する研究」「レクリエーション活動に関する研究」「レクリエーションプログラムに関する研究」「レクリエーション指導に関する研究」「レクリエーションサービスに関する研究」「運営管理に関する研究」「レクリエーション資源・空間に関する研究」「レクリエーション政策に関する研究」「レクリエーション運動に関する研究」等に分類されている<sup>17)</sup>ことが分かる。

さらにこれらは、それぞれのテーマによって、さまざまな学問領域に関連することになり、その関係する学問領域は、単純に考えても哲学・歴史学・社会学・心理学・経済学・財政学・経営学・地理学・教育学・体育学・生理学・医学・工学・造園学・林学・農学等を考えることができ、レクリエーション研究に関連する学問領域の広さに驚かされる。

このことは、江橋が第14回日本レクリエーション学会大会の講演「これからのレクリエーション研究」のなかで次のような諸点について述べている。「レクリエーション研究は新しい分野であり、新しい研究の可能性のために固定的な枠組みを避ける」「既に体系化された歴史ある学問領域の研究や研究方法からアプローチする」「中心となる領域を横軸に、諸学からのアプローチを縦軸にとって、その二つの枠組みの結び合わせで研究をすすめる」「レクリエーション研究は学際領域であり、幅広く柔軟性のある考え方で臨みたい」等<sup>18)</sup>である。

このようにレクリエーションに関連する領域は多岐にわたり、その研究の可能性には前途に洋々たるものがあり、これらの研究にたずさわる者にとってこれほど恵まれた領域はないともいえる。

近年、レクリエーションに関連する研究は、ますます多くなり、文字どおり学際的な研究領域として脚光を浴

びている。しかし、つぎつぎに発表されるレクリエーションに関連する研究に接するとき、それぞれの研究が素晴らしいものであればあるほど、時として不安を覚えることがある。なぜなら、労苦の結果である研究成果が真に価値あるものであるために必要な基本的部分が置きざりにされたままになっているような気がしてならないからである。

基本的な部分とは、レクリエーションという言葉が表すべき概念のことである。「レクリエーションとは何か」というレクリエーションの基本的な意味については、歴史のあるいは哲学的な観点で研究がすすめられているが、未だレクリエーション学の領域内でさえ共通理解を得ているとはいえないし、まして関連する諸領域においてはなおさらである。

レクリエーションに関連する領域が広ければ広いほど、またレクリエーション研究に対する期待が大きければ大きいほど、この基本的な部分での共通理解が急がれるのである。レクリエーションという言葉を使った研究でありながら、領域ごとに別々の解釈から出発し、研究の結果もそれぞれの領域内でしか理解されないものが多いとなっているのが現実のようである。本来的には、レクリエーションという同じ言葉を使った研究であるならば、どのような領域においても、それらの研究が正確に理解され、さらには正当に評価されるべきなのである。

現在のレクリエーションに関する研究と研究領域の姿を図1のように示すことができる。また、図2は本来の理想とする姿を示している。

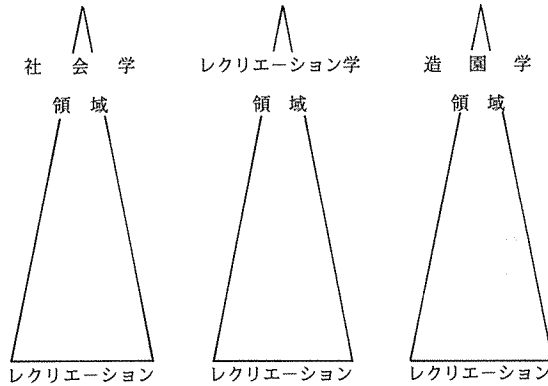


Fig. 1. Present structure in recreation research activities.

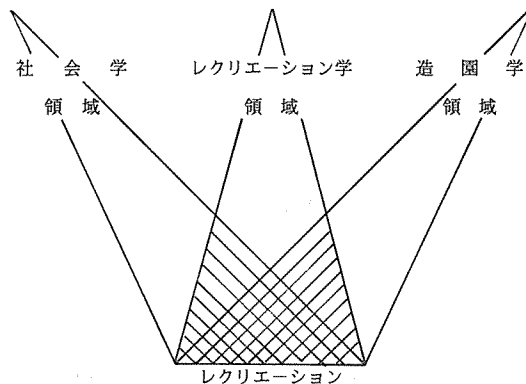


Fig. 2. Proposed structure in recreation research activities.

図1は、レクリエーションに関する現在の研究活動にとって、それぞれの研究の底辺となるべき「レクリエーションの意味」がばらばらなままであり、そのうえに積み上げられる研究成果としての三角形も、ほとんど関連性を持たないものとなっていることを示している。

図2は、本来の理想的な姿として、いかなる研究領域や研究テーマであろうとも、その底辺である「レクリエー

ションの意味」を同じくした場合の関連性と共通性を示している。斜線部分は、いかに研究領域が離れたものであっても、底辺の一致による理解と合意の存在を示している。

## まとめ

「語源的側面」からは、レクリエーションという言葉が、もともと「生活空間のあらゆる側面に適用されてきた概念を持ち」<sup>19)</sup>、その概念の中心となるべきものは、「あらゆるもの照らす太陽光線に相当する」<sup>20)</sup>意味を持つべきであるとして、人間にかかわるある状態、「人が生き続けていくためのエネルギーの回復」、つまり「人間性の回復」という概念をレクリエーションという言葉の本質的な意味とするべきであるとした。当然、ここでいう「人間性の回復」の意味は、その過程において「楽しさや喜び」の要素が大きな意味を持っていることも含んでいる。

「言語使用の側面」では、レクリエーションの意味に関する混乱は、レクリエーションという言葉を使用する場面における曖昧さに大きな原因があるとして、その曖昧さを追求し、さらに言葉の明確な使い分けについての必要性を指摘した。特に哲学的課題の一つである〈内包〉と〈外延〉の関係から、レクリエーションの本質的な意味と、その〈外延〉として存在するさまざまな言葉の意味を探り、それらがどのように使用されるべきかを考察している。具体的には、「レクリエーション」という言葉と「レクリエーション活動」や「レクリエーション行動」などを区別して使用することの意味と重要性を明らかにした。

「関連する社会的事象の側面」では、労働や余暇の場面におけるレクリエーションの意味を明確にするとともに、「人間性の回復」という概念を本質的な意味としたとき、レクリエーションが労働や余暇という社会的事象とのみ関連するものではないことを指摘している。さらにそのような考察のなかから、レクリエーションが人間の生きるすべての時間に関連するものであることを位置づけ、レクリエーションという言葉の意味の大きさを明らかにした。

「レクリエーション研究領域の側面」では、レクリエーション研究に関連する研究領域の驚くべき広さと、研究活動に最も必要とされる基本的部分の合意が未だ為されていない点を指摘し、これらの理由からも「レクリエーションの意味」の確立と合意が急務であることを述べた。

このように、四つの側面から考察し、それぞれから、レクリエーションの本質的な意味の確立や用語の統一の必要性について、さらに大きな今後への課題を得た。

レクリエーションという言葉が、「生活空間のあらゆる側面に適用されてきた概念」や「あらゆるものを照らす太陽光線に相当する概念」という基本的な部分を持つとしたとき、レクリエーションは、生活のすべてにかかわる「生き方」の一つとしての意味を持ち、すべての時間、すべての場面で大切にされなければならない言葉となるのである。さらに語源の意味から、その「生き方」は「人間らしさを取り戻す」という意味を持って位置づけられるべきなのである。

もちろん、ここでいう「人間性」や「人間らしさ」とは何を示しているのかを当然考えなければならないが、これは永遠の哲学的課題でもあり、その全容を明らかにすることは不可能に近いことであるかもしれない。その意味からいえば、狭い範囲に止まることになると思うが、ここでは「人間性」や「人間らしさ」を「回復すべきもの」という観点から積極的な立場でとらえ、その解釈を、世界保健機関 (World Health Organization) の健康の定義にある安寧な状態 (原文では well-being となっている) という表現が表そうとしている千差万別の「健康な状態」の存在をふまえたうえで、「身体的にも精神的にも、そしてまた社会的にも健康で、そのうえにさらなる健康を常に求めうる人間に内在する状態や力」として、一つの見解を示しておきたい。

レクリエーションという言葉の意味を、大きく「人間性の回復」とすることで、語源的にも説得力のある言葉となり、レクリエーションという言葉を使用する場面においても明確な意図を持って使い分けができるようになり、そのことが、関連する〈外延〉としての具体的な事柄の意味をも明確にすることになる。また労働や余暇という部分にレクリエーションがどのようにかかわればよいかもはっきりし、レクリエーションが労働や余暇とのみかかわる観念ではなく、もっと広く人間の生きるすべての時間にかかわるものであることを位置づけることができるのである。さらにレクリエーション研究の分野においても、それぞれの研究のベースとなる基本的な言葉としての「レクリエーション」を、共通した認識で理解することができるようになり、すべての研究につ

(吉 田)

いて、その目的として「人間性の回復」という最終的なテーマを掲げることで、それぞれの研究が、関連するさまざまな領域のなかで等しく認知され評価されることになるのである。

もはや躊躇するときではない、むしろ遅きに失した感もあるが、今こそ勇気を持って「レクリエーションの意味の確立と統一」にとりかからなければならない。そのことが、わが国におけるレクリエーションのさらなる発展を促すことになり、ひいては人々の「より人間らしい」豊かな生活を創造することになるのである。

### 引用文献

- 1) 片岡暁夫, 『レクリエーション学の方法』, 日本レクリエーション学会編, ぎょうせい, p. 40, (1987).
- 2) 中村要, 同上, p. 25, (1987).
- 3) 芳賀健治, 同上, p. 60, (1987).
- 4) 片岡暁夫, 浅田隆夫, 芳賀健治, 平井章, 1978年筑波大学体育研究紀要1, 16~18, (1978).
- 5) 同上, p. 18, (1987).
- 6) 同上, p. 18, (1987).
- 7) 同上, p. 18, (1987).
- 8) 芳賀健治, 前掲1), p. 58, (1987).
- 9) 篠田基行, 『レクリエーション哲学』, 逍遙書院, p. 211, (1975).
- 10) 同上, p. 229, (1975).
- 11) 芳賀健治, 前掲1), p. 59, (1987).
- 12) 吉田圭一, 武庫川女子大学紀要(第36集 教育学科編), 81~87(1989).
- 13) 辻功, 『新時代の余暇』, 日本余暇学会編, 第一法規, p. 209, (1975).
- 14) 藪田碩哉, 『レクリエーションと現代』, 日本レクリエーション協会編, 不昧堂出版, p. 215, (1976).
- 15) 前掲9), p. 231, (1975).
- 16) 増田靖弘, 前掲14), p. 109, (1976).
- 17) 前掲1), (1987).
- 18) 江橋慎四郎, 「レクリエーション研究」(第13号), 日本レクリエーション学会, pp. 27~29, (1985).
- 19) 前掲4), p. 17, (1978).
- 20) 前掲4), p. 18, (1978).